

援助技術を駆使して身体測定をする学生の姿や、保育実践の「学びの場」として「くれまちす」が機能していることを示したい。

Ⅱ. 実践研究の方法

1. 授業科目・対象学生・身体計測に関して

授業科目は「保育内容演習（ゼミ）」であり、受講学生は短期大学部幼児教育学科第三部3年生13名である。対象学生は全員、教育実習Ⅰ、Ⅱ、保育所実習Ⅰ、保育実習（施設など）を経験している。また、身体計測の対象科目である子どもの保健Ⅲを受講中であり、「くれまちす」における身体計測実施にあたり、模型人形を使って演習をおこない、手技の注意や確認を行った。

2. 事前準備：「くれまちす」における身体計測実施に向けて

実施に向けて、身長・体重を単に測定するだけではなく、計測値が記録できるカードを事前に各学生が作成（図1 せいちょうカードの例）することとした。また、身体測定を実施することの告知ポスターを作成し、「くれまちす」内に掲示していただき、当日を迎えることとなった。



図1 せいちょうカードの例

3. 実施日と実施場所

2016年7月5日（火）11時30分から1時間、子どもたちや保護者が普段遊んでいる部屋とは少し離れた場所にあるプレイルーム2で行った。

4. 身体計測の実際

市町村で実施される乳幼児健診における身体計測では、全裸が基本である。演習でもそのように指導しているが、「くれまちす」での身体測定では、子どもたちが衣類を着脱して測定するのは環境構成上、困難であった。事前のくれまちす職員との話し合いの結果、気軽に身体計測ができる場所として提供する意味を含め、着衣のまま身長・体重の測定を行うこととなった。身長計、体重計ともに、乳児用（臥位で測定）と幼児用（立位で測定）のものを用意した。

室内入口で名前を確認し、「せいちょうカード」に記入した後、子どもの成長に合わせて（立位で測定するか、臥位で測定するかを調整し）、身長計や体重計の場所へ学生が誘導した。

5. 実施後の振り返り

身体計測実施後、学生（13名）と教員（1名）を交え、実践に関する率直な感想を伝えあった。その後、学生自らが振り返りを促進するために、身体計測を実施して①良かった点、②改善したほうがよい点、③次回に向けて何をすべきか、という3点について記述させ、その日のうちに回収した。

Ⅲ. 結果と考察

身体測定に参加した親子は10組であった。学生の振り返りレポートの内容は表1に示す。くれまちす職員の方々が、親子をプレイルームから計測場所までの誘導をしてくださった結果、親子の参加人数が集中することなく、和やかな雰囲気の中、身体計測をすることができた。

「くれまちす」を利用している子どもは0～2歳児が中心であり、ほとんどの子どもが、部屋に入室すると親に抱きついてなかなか離れない、体重計に乗りたがらない様子に学生は戸惑っていた。また、学生の姿を見て泣き出したり、逃げ出したりする子どもの姿もあり、なんとか楽しませようとする学生の様子が観察された。学生の振り返りにも、良かった点として手遊びを行ったこと、笑顔で対応したこと、母親と少し話をしながら和やかに活動できたことが記述されている。

表 1. 学生による身体測定振り返り

学生	良かった点	改善点	次回に向けて
1	・子どもを楽しませようと手遊びを行っていた。 ・ずっと笑顔だった	・体重や身長を測るのを子どもが怖がっていたので、子どもが乗りたと思うように工夫する	・子どもたちは手遊びが大好きなので、測定が終わった後でも行っていみるとよい
2	・アドリブでも手遊びを取り入れながら子どもをあやすことができた。 ・お母さんたちとも少し話をしながら和やかに活動ができた	・子どもたちが不安な気持ちにならないように常に笑顔で話しかける ・「怖い」という気持ちを紛らわせるために、あやしたり、測定器をかわいいデザインにする ・音楽(童謡)をかける	・子どもが「注目されている」と思わないように敢らばる ・それぞれで活動すると子どもの不安感がなくなると思う
3	・みんな笑顔でできた ・泣いている子に手遊びをしていた	・大人の人数が多い	・素早く計測をすることが大切だと思う
4	・カードを作り渡すことで、親さんたちにとっては目で見えて記録をのこすことができたため、客観的に子どもの成長を感じてもらえたと思う	・計測するとき、子どもがのってみたいと思えるような(怖いと思わない)配慮ができていなかった。やってみるまで分からなかった。 ・素早く正確にという点あまり出来ていなかった	・子どもたちが怖がらず、むしろ楽しんで行えるような配慮をしてほしい ・子どもたちがためらっていたら、自分たちが実演して見せてもよいと思う ・音のなるおもちゃがあったら、子どもの気を引くことができるかも。子どもたちにとって知らない間に済んでいたほうが、怖くないと思う。 ・学生がかたまりすぎると威圧感があるからばらける
5		・大人数で注目する姿があって子どもが怖がっていた。 ・手遊びなど、子どもが楽しめる工夫が必要	
6		・器具が無機質においてあると怖いと感じた ・子どもが自分から乗ってみたいかなるような絵が貼ってあるとよいと思った ・お母さんももっと一緒に参加できるように促すとよいと思った	
7	・親子に笑顔で接することができた ・カードを作成したため、身長体重を記入して渡せてよかった	・殺風景な部屋で子どもが少し怖がってしまったかもと思った ・キャラクターやお花など、画用紙で飾り付けをするとうよかった	・体重計に乗るのを嫌がる子が多かったので、気の引かせ方など工夫するのいいと思う
8	・手遊びをしている子、学生がみんな笑顔だったのが良かった ・常に声をかけていてよかった	・器具に装飾をして、子どもが近付けるようにしたい	・笑顔で怖いものではないことを伝えながらするとよいと思う
9		・人がたくさん集まっていると怖いと思った ・子どもたちが興味を持つような飾りや絵など貼っていくとよいと思った ・順路がわかるように工夫するのいいと思った	
10	・手遊びが良かった	・子どもの気を紛らわせるものを用意しておこうと思った	
11		・慣れない空気で子どもが不安そうだった ・器具の上に乗ったりするのは怖いと思った	・もっと楽しめる工夫をするとよいか ・お母さんも一緒に楽しめるのもっと良いと思った
12	・手遊びをやっていて興味を持っていた	・飾りがすぐないので、もう少し怖がらないように楽しめる雰囲気をつくりたい	
13	・立てない子をスムーズに寝て測るところに誘導することができていたのが良かった	・器具が簡素のもので、子どもたちにとっては恐怖になっている姿が見られた。器具の周りに飾りを補うとよいと思いました	・お母さんの身長も測って欲しい

注：空欄は記載なし

また、身長や体重を測る際、泣いている子どもの母親自身が、子どもを支えたり、学生と一緒に「こっち、こっち」と視線をそらせるような関わりを共同で行っていた。そして、測定ができたときには、母親と一緒に学生が喜んだり、子どもに対して「頑張ったね～」などと一緒に労ったりする言葉がでていた。このように、今回の身体測定は学生だけの力では成立せず、くれまちす職員による子どもと保護者の誘導による配慮と、母親(保護者)の協力があってこそ、測定ができたと考えられる。

身体計測の実施に関する振り返りでは、全ての学生が改善点に関する記述を行っていた。実際の手技に関する反省をした学生は2名（学生3、4）のみで、ほとんどの学生は、計測を行う子どもが怖がる様子に着目し振り返りを行っていた。例えば、身長計にのっても背伸びをしまっすぐ立たない、体重計にのせようとする足がバタバタ動かし、体重計の上じっと立ってられず、すぐに逃げようとする・母親にしがみつくななどの子どもの姿から、【子どもが（体重計や身長計に）乗りたいと思うような工夫が必要】（学生1、3、8）、【測定時に子ども気を紛らわせる】（学生2、4、7、10）、【測定器を飾りつけて楽しい雰囲気にする】（学生2、7、8、9、12、13）という改善点を記述していた。

通常、測定器具はその正確性が重要とされるため、過度な装飾は不適切とされる。しかし、「くれまちす」での実践を通して学生たちは、無機質な器具類は子どもにとって馴染みがなく、もっと子どもが親しみやすいかたちに工夫したり、楽しく身体測定ができるように改善したりする必要性を強く感じ取っている。これらのことは、子どもの保健Ⅲにおける模型人形を使った演習や事前の練習では気づけなかったことである。学生4も指摘しているように、地域の子どもの測定した学生が、測定される側の子どもの気持ちになって「気づいた」ことである。

学生の中には、教育実習や保育実習の中で身体計測に携わった経験があるものもいた。しかし、そこでの子どもたちは、通いなれた場所で、なじみの先生が測定するという意味で、「くれまちす」での身体測定とは、子どもたちが置かれている人的・物的環境も大きく異なる。学生たちは、初めて出会う子どもたちに対して、どのように接したら怖がらずに楽しく身体計測をできるのかについて、実践しながら考え、楽しい時間を作り出す「手遊び」を笑顔で行い、子どもやその保護者と関わっていた。また、「身長だけでも測っておきたい」という母親に対して、母親と学生と一緒に子どもの身長を計ることを通じて、自然なかたちでコミュニケーションが取れた（学生2）と考えられる。また、子どもから、「泣かれる」経験をほとんどしたことがない学生にとって、身体測定実施後にくれまちすの職員から「子どもが泣くのは当たり前だから、そんなに気にしないで大丈夫よ。私たちだっていっぱい泣かれたものよ」と、声をかけていただいた。職員からの助言は、学生にとって心強いものであり、安心した様子がうかがえた。

「くれまちす」における身体計測の実践を通して、実際の子どもの身体計測は保健技術だけでは対応できず、子どもを楽しませるための援助技術（手遊び、素話、作品作りなど）や保護者対応（コミュニケーション、保護者との関わり）が必要となることを学生自身が気づき、次の実践につなげるために何が必要かを考える機会となっていることが明らかにされた。今回の実践では、「保護者と一緒にいる子ども」と関わる中で、保護者から離れたくないと思う子どもに対応する難しさもあった反面、身体測定という場が学生と保護者との関わりを促進する機能を有していたとも考えられる。子どもと学生と一緒に手遊びをしているときに、他の学生が「（お子さんは）おいくつですか？」「お家はここから近いんですか？」などと尋ねたり、保護者から「何年生ですか？」「この手遊び歌、初めて聞きました」というように、自然に会話している姿も見られた。また、泣いてあやされている子どもを見て「かわいい」と連呼する学生の姿もあった。実習では得られない体験として、身体計測の実施は、評価の目を気にせず活動できること、親子の触れ合いの様子を、自然な形で（観察実習ではなく）身体計測を通じて観察できたともいえよう。

IV. 総合考察

ここからは、保育者養成校における学生の地域子育て支援の実践活動と、2018（平成30）年4月1日より適用となる新しい保育所保育指針の改定を関連させて考えていきたい。

新しい保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ（厚生労働省、2016）によると⁵⁾、保育をめぐる近年の状況として、0～2歳児を中心とした保育所利用児童数の増加、子育て世帯における子育ての負担や孤立感の高まり、児童虐待相談件数の増加が指摘されている。これらを受けて、保育指針改定の方向性として次の5点が挙げられている。①乳児・1歳以上3歳未満児の保育に関する記載の充実、②保育所保育における幼児教育の積極的な位置づけ、③子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえた健康及び安全の記載の見直し、④保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援の必要性、⑤職員の資質・

専門性の向上、である。

保育施設に求められる支援機能は多様化・複雑化しており、子育て支援をはじめとする幅広い専門性を生かした役割の発揮が求められている。特に、子育て支援に関しては2011年度から「保育相談支援」という科目が新設され、子育て支援の担い手としての保育者の役割の重要性が述べられてきた。そして、④で挙げられているように、地域の子育て家庭の「子育て」「子育て」を支える役割も求められている。子育て支援について学ぶ科目は「家庭支援論」「相談援助」「保育相談支援」というように充実が図られているものの、子育て支援を実践的に学ぶ「実習」などは義務付けられておらず、現在は、養成校の問題意識などにより様々な取り組みが見られている⁶⁾。そういった中で、三好(2016)は、「各養成校が取り組んでいる子育て支援活動が、どのような教育効果をあげているのか検証し実践の質を上げていくことは、保育者に求められている時代のニーズである子育て支援力につながるのではないかと述べている⁷⁾。

福井・小栗・滝川(2008)は、学生が参加する子育て支援活動に関する調査を行い、66校の保育者養成短期大学から回答を得ている。その結果、学生が参加する子育て支援を行っている学校は、一方的に親子に見せる活動を行っている(例えば、ペープサート、パネルシアターなど)例が多く、主に子どもを対象としたものであったことを報告している⁸⁾。このような活動は、子どもが楽しむという観点では意味があるが、その活動によって保護者と関わったり、話をしたりすることは難しく、保護者を理解したり、保護者支援の活動につなげていくことは困難だと考える。

子育て支援には決まった形態があるものではなく、その地域や家庭に必要な支援を提供し、支援のネットワークを広げていくことが求められている。本研究で行った身体計測は、地域の保護者のニーズがあったとはいえ、子どもが楽しんで行うという活動とはいえない。実施した学生にとってみれば、なぜこんなに子どもに泣かれるのか、と混乱する活動であったともいえる。しかし、子どもが嫌がるからこそ、保護者と一緒に取り組んだり、子どもの頑張りを一緒に労ったり、子どもを抱っこさせてもらったりというように、身体計測は、学生が子どもとだけではなく、その保護者とも自然に関われる取り組みの1つとして機能していることを提示してきた。このことは、地域の子育て家庭の支援を考える機会としても有効であったと考えられる。また、学生にとって、子どもと直接触れ合う場が実習以外にもあること、身体計測の活動を通して、保護者のニーズを満たしていると実感できる機会となっていた。手遊びや素話し、絵カード作りなど、子どもの保健では中心的に扱わない表現領域の学習成果を発揮できたともいえる。これらのことから「くれまちす」において、身体計測という保健援助実践は、多様な学びを実践する場としても機能していると考えられた。

V. 今後の課題

「くれまちす」は、大学の地域貢献のみならず、大学の利点を生かした取り組みが期待されており、子どもの育ちに関する地域のセンター的機能を担うことが可能である。実際、保育者養成課程を抱え、地域の幼稚園・保育園及び児童福祉施設等、子どもの育ちに関わる様々な施設と緊密なネットワークを有する本学においては、利用者や岐阜市の関連行政機関のみならず様々な専門的施設とを結びつけながら地域の子育てコミュニティを構築することに貢献していくことも求められている。「くれまちす」における活動実践が、学生や地域にどのような効果をもたらしていくのか、保育者養成段階における学びが、その後、保育者としてどのように寄与していくのかも検討していきたい。

特に、様々な大学で行われている学生による子育て支援実践の中でも、身体計測を継続的に行っているという報告はまだなされておらず、本研究を継続していくことによって得られる知見の意義は大きいと考えられる。そうとはいえ、養成課程の中で子育て支援活動に参加した現職保育者の中には、学生時代を振り返り「親子と関わることの不安や困難さが先に立った」と記述している例が報告されており⁹⁾、学生が「くれまちす」に参加する時期や実習経験の有無など学生の属性に関して注意深く検討していくことも重要であると考えられる。

今回の身体測定に参加している学生はゼミ生を中心としており、その人数は限られている。また、その学生は、地域の子どもたちや保護者と関わりたいと希望して活動しており、そのような意味において

積極性や学習意欲、参加態度も当然、最初から高い集団であったと考えられる。今後は、全ての学生にとってより開かれた身体計測実施に向けた授業展開を視野に入れ、活動を継続していきたい。

注・文献

- 1) 厚生労働省 (2017) : 地域子育て支援拠点事業の実施について (実施要綱) (平成 29 年 4 月 3 日)
<http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000103063.pdf>
- 2) 松永愛子 (2014) : 親子の「主体性」を育む「地域子育て支援センター」におけるスタッフの援助実践, 目白大学 総合科学研究, 10, 9-22.
- 3) 入江礼子・小原敏郎・白川佳子 (2017) : 子ども・保護者・学生が共に育つ保育・子育て支援演習—保育者養成校で地域の保育・子育て支援を始めよう—, 萌文書林, 東京.
- 4) 石田開・田中まさ子 (2011) : 保育者養成課程の学外実習における保護者に関する経験の頻度—保護者とのコミュニケーションスキル育成への手がかりとして—, 岐阜聖徳学園大学短期大学部研究紀要, 43, 161-173.
- 5) 厚生労働省 (2016) : 保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめより改定の方向性 (平成 28 年 12 月 21 日厚生労働省発表)
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000148655.pdf.
- 6) 三好年江 (2016) : 保育者養成課程における子育て支援力の評価に関する研究 - 先行研究のレビュー, 新見公立大学紀要, 37, 99-106.
- 7) 6) 再掲載
- 8) 福井逸子・小栗正裕・瀧川光治 (2008) : 「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究 (1) —短期大学へのアンケート調査の分析を通して—, 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部紀要, 1, 135-150.
- 9) 橘 知里・小原敏郎 (2014) : 保育者の子育て支援力の要請に関する研究—養成段階からの学びの連続性に着目して—, 日本家政学会誌, 65, 415-422.